登山家にとっての表現はあくまで登山行為そのものであり、その登山行為をあとから文章にまとめたところで、そんなものは所詮”おまけ”、彼の登山の副次的な生産物にすぎない。

「登山家にとっての～そのものであり、」と、「その登山行為を～すぎない」は、ただ並列されているだけではなく、前にある文を、後ろの文で言い換えて表現しています。また、これくらい長い文を英訳したときに、ネイティブチェックで「２文に分ける」と指示されたことが何回かありました。みんなにはなかなか難しい発想かもしれませんが、ここではそれを思い出し、それぞれバラバラな文としてあらわすことにしました。

A.　　登山家にとっての表現はあくまで登山行為そのものであり、

まず、日本語は「あり、」で終わっていますが、「そのものである」という文の末尾だと考えます。そして、述語を探します。字面を生かすと、「表現は行為そのものだ」という骨組みから、**S is an act「S は行動だ」**をベースに作ることが考えられます。実際それでもいけると思うのですが、もう少し、使い慣れた述語を探してみます。

この日本語で、登山家が何をしているかというと、日本語でも表されているように「表現をする」をしています。その行為は、僕が知っている表現の中では express で表せると思いました。**S express A「S は A を表現する」**を利用します。

(1)　　S express A

ここで **S** である【表現している人】は「登山家」に当たります。下線部以前に出てきている「登山家」を指すのであれば the climber だし、【一般の登山家】を表すために a climber としてもいいと思いますが、今回は前者を選び、それに対応して述語を expresses にしました。

(2)　　the climber expresses A

つぎに **A** である【表現する内容】は「登山」ではないことをきちんと読み取りました。「登山という行為を通して自分を表現する」という文脈なので、【表す内容】は【登山家自身】です。**S** に the climber としたのでそれに対応する himself を置きました。

(3)　　the climber expresses himself

あくまで登山行為そのものである

ここまでで表現しきれていない部分を確認すると、「あくまで登山行為そのものである」の部分です。文の中核は出来上がっているので修飾語として表現する方向を考えてみます。日本語自体が修飾表現の形になっていないので、とりあえず、この日本語あたりのイメージをしっかり浮かべて、少しずつ英語にしていくことを考えました。

そうすると、「登山行為そのもの」から【登山】が浮かんできました。【登山】は【出来事】なので、それそのままを述語としてあらわし、そこを足掛かりにすると、文として表せそうです。**S climb A「S は A を登る」**を利用します。

(4)　S climb A

S には【登っている人】なので、the climber「登山家」、2 度目なので、he にします。それに合わせて climb は climbs にします。**A** には【登る対象】です。登っているのは a mountain ですね。ここで表している内容的に、一回きりの行為ではないので、山がいくつかあるのが想像できます。mountains のように複数にして、次のような文ができあがります。

(5)　he climbs mountains

予定通りこれを修飾語として **(3)** につなげます。文を文につなげるので、接続詞の中で、何か適当なものがないかを探していきました。英語で頻度がかなり高い等位接続詞は and / so / but、従属接続詞は because / if / though / when です。この中で一番しっくりきそうなものは？という発想で眺めてみると、**when (S) (V)「(S) (V) するとき」**がそれだということに気が付きました。

(6) The climber expresses himself when he climbs mountains.

B.　その登山行為をあとから文章にまとめたところで、そんなものは所詮”おまけ”、彼の登山の副次的な生産物にすぎない。

「そんなものは“おまけ”、生産物にすぎない」の部分を述語とし、「その登山行為を～ところで、」などの修飾語を後から付け足していこうと思います。

(a)　そんなものは”おまけ”、彼の登山の副次的な生産物にすぎない。

はじめに「おまけ」と、「生産物」の関係について考えてみました。これは二つのことをただ並べているのではなく、「生産物」という表現で「おまけ」の説明をしています。**A** の説明をする時に、その説明である **B** を、カンマを挟んで直接置くこともできますが、「言い換え」で説明をしているととらえ、, or「つまり」を利用してつなげることにしました。ここまでくると、ここの全体像が見えてきました。

(7)　S is A, or B

A に入れる「おまけ」は、ぱっとは英語が浮かびにくい表現なので、イメージを膨らませます。「おまけ付きのおやつ」の「おまけ」は、【プラスアルファ】のものです。それを表せる英語を探してみると、extra が浮かんできました。これ自体は形容詞です。「おまけ」は、いろいろな形があって、何か、具体的に決まっているわけではありません。こういった時には something を用いて表します。最終的に、something extra としました。これは難しいかもしれませんね。

B に入れるカタマリの中心は「生産物」です。可算名詞用法であることに気を付き、a product としました。

これまでできたところを表現してみます。

(8)　S is “something extra”, or a product

S に入れる「そんなもの」は、前に出ている「登山行為をあとから文章にまとめる」ことです。ある程度の大きさのある内容なので、it ではなく、that で処理することにします（this でもよかったとは思います）。

(9)　that is “something extra”, or a product

副次的な

次に、「副次的な」です。難しいと思いました。「副」という表現から、side effect「副作用」が利用できないか考えてみたのですが、side effective なんて表現があるのか自信がなく、別の表現を考えてみました。次に、【主が一番目、副が二番目】というイメージから、secondary が浮かんだのですが、「副」のイメージとズレるような気もします。でもこれしか出てこなかったので、この表現を使い、a secondary product とすることにしました。

(10)　that is “something extra”, or a secondary product

彼の登山の

最後に「彼の登山の」です。そのまま訳すと of his climb [climbing] になるかとおもいます。が、この「の」は、ただの「の」ではなく、【そこから生じる】というイメージだったので、from his climb としました。これも難しい発想ですよね。

（11）　that is “something extra”, or a secondary product from his climb

所詮

では残りの「所詮」です。これは「おまけ」を【大事ではないととらえている】感じがします。頭の中を探してみると、just が浮かびました。また、後ろの「にすぎない」のイメージと大体同じということにも気が付きましたが、something extra の前だけに置けばそれ以降を【大事ではないととらえている】ように表せると思い、1 回だけ表現することにしました。出来上がったのがこれです。

（12）　that is just “something extra”, or a secondary product from his climb

（b）　その登山行為をあとから文章にまとめたところで、

この部分はカタマリとして修飾表現になります。修飾語はつなぎの表現から考えると便利だと知っているので、日本語のつなぎの表現が頻繁に置かれる後ろの部分に着目しました。

a.　（S）（V）したところで

この「ところで」は、【話しの転換】を表す by the way のイメージでも、【とある場所で】を表す in a place のイメージでもありません。

じっと考えてみると、「まとめる」という【大がかりな作業】のイメージと、「所詮」の【たいしたことはない】から、【逆】のイメージでつなぐといいと発想することができました。

修飾表現として【逆】でつなぐ場合、**though (S) (V) 「(S) (V) だけど」**がぱっと浮かびますが、「まとめたけれど」とすると、【実際にみんなまとめている】という雰囲気になってしまいます。これが【仮の話】ということを意識して、**even if (S) (V) 「仮に (S) (V) しても」**を利用します。

(13)　even if (S)(V)

b.　その登山行為を後から文章にまとめる

その **(S) (V)** に入れるのは「その登山行為を後から文章にまとめる」です。述語から取り組みます。
「まとめる」は、ぱっと英語が浮かびやすい表現ではないですよね。なので、イメージを浮かべました。作家として、【パソコンに向かって、もしくは昔なら、紙面に向かいながら、登山行為を思い出しながら表現している】様子が浮かびました。これのことを英語では write と言いますよね。**S write A 「S は A を書く」**を利用することにしました。

(14)　S write A

【書く人】を表す S には、「登山家」が入ります。引き続き he で表し、それに対応して writes にします。**A** には write a diary のように【書き上げた後に出来上がるもの】が入ります。「まとめた」後に出来上がるのは【本】なので、**A** には a book を入れておきます。

(15)　he writes a book

「その登山行為を」を処理します。修飾語ですね。どうやってつなぐか考えます。「その登山行為を」の「を」では、前置詞などのつなぎの表現のヒントにはなりません。イメージを浮かべました。「その登山行為」は、【本の中身】になりますね。これもなかなかつなぎの表現が出てきません。仕方なしに a book の後ろに来そうなつなぎの表現を探してみると **about A「A について」**が浮かんできました。**A** に「その登山行為」を表す his act of climbing を入れました。「考え方」を英語で表すときに my way of thinking などと言ったりします。その形を真似ました。

(16)　he writes a book about his act of climbing

最後に「あとから」です。「から」とありますが、【起点】を表しているわけではありません。【登山の後】のことを言っているだけです。なので、after that や later がいいと思い、後者を置くことにしました。

(17)　he writes a book about his act of climbing later

later はこの位置だと、climbing を修飾しているように見えると感じます。writes を修飾しているということを示すため、**S write A** のカタマリの後ろに置くことにしました。

(18)　he writes a book later about his act of climbing

c.　a. + b.

合計すると次のようになります。

(19) even if he writes a book later about his act of climbing

(c) **(a) + (b)**

そして **(19)** は、メインの文である **(12)** の前後どちらに置いてもいいのですが、今回はカンマを挟んで、前に置くことにしました。

(20) Even if he writes a book later about his act of climbing, that is just “something extra,” or a secondary product from his climbing.

C.　　A. + B.

A.と B.を足すと、以下のようになりました。

（21）　The climber expresses himself in the very act of climbing. Even if he writes a book about his act of climbing later, that is just “something extra,” or, a secondary product from his climb.

Model Answer

The climber expresses himself in the very act of climbing.　Even if he writes a book about his act of climbing later, that is just “something extra,” or, a secondary product from his climb.